情報モラルを身に付けさせる道徳教育の在り方

― 道徳の時間と教科等の関連を生かした情報モラル学習プログラムの開発を通して ―

呉市立川尻中学校　河野　靖弘

研究の要約

本研究は，情報モラルを身に付けさせるために，道徳の時間と教科等をどのように関連させればよいかということについて考察したものである。情報モラル教育の目標として，『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』の二つを相互に関連させながら，情報社会を生きる上での正しい判断力を身に付け，よりよい情報社会の創出を目指す実践的な力（情報モラルの実践力）を育てることが示されている。そこで，道徳の時間を要としながら，二つの領域を，情報社会を生きる上での正しい判断力を身に付けさせる視点（「判断力を高めるための関連」）と，情報モラルの実践力を育てる視点（「実践力を高めるための関連」）で，関連させていく情報モラル学習プログラム（以下，「プログラム」とする。）を開発し，実践した。道徳の時間のみ実践した学年と比較した結果，本プログラムは，情報モラルを身に付けさせる道徳教育において有効であることが分かった。

キーワード：情報モラル　心を磨く領域　知恵を磨く領域

Ⅰ　研究の目的

社会の情報化が進展し，コンピュータや携帯電話等が普及することにより，インターネット上の誹謗中傷やいじめ，犯罪や違法・有害情報など，情報化の影の部分が深刻な社会問題となっている。所属校においても，コミュニティサイトにおけるソーシャルゲームサービス等で，友達や見知らぬ人との交流や，課金をめぐるトラブル等が発生している。中学校学習指導要領総則（平成20年）では，各教科等の指導に当たって，生徒に情報モラルを身に付けさせることが明記され，教育活動全体で生徒に確実に情報モラルを身に付けさせることが求められている。

これまで，情報モラルの指導に当たっては，さまざまな教材開発がなされてきたが，広島県立教育センター（平成24年）は，『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』を関連させた学習プログラムを開発していくことを課題として挙げている。

そこで，本研究では，『心を磨く領域』である道徳の時間と『知恵を磨く領域』である教科等の関連のさせ方について整理した上で，生徒の実態を考慮しながら，情報モラル学習プログラムを開発する。また，その実践を通して効果を検証し，情報社会を生きる上での正しい判断力を身に付けさせた上で，情報モラルの実践力を育てる道徳教育の在り方を明らかにしていくことを目的とする。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

1　情報モラルを身に付けるとは

高等学校学習指導要領解説情報編（平成12年）において，情報モラルは，「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」[1)]であると定義された。

また，すべての先生のための「情報モラル」指導実践キックオフガイド（平成19年，以下「キックオフガイド」とする。）では，情報モラル指導に含まれる内容として，情報社会における正しい判断や望ましい態度を育てる『心を磨く領域』と，情報社会で安全に生活するための危険回避の方法の理解やセキュリティの知恵，技術，健康への意識を育てる『知恵を磨く領域』の二つの領域を挙げている。また，次頁の表１のように，二つの領域は，さらに五つの分野で構成されている。

つまり，情報モラルを身に付けるとは，『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』での学習内容を身に付けることであり，情報社会における正しい判断や望ましい態度，そして，安全に生活するための危険回避の方法を理解し，セキュリティについての知恵，技術，健康への意識を身に付けることであると整理した。

表１　情報モラル教育の内容（２領域５分野）

２領域	５分野
心を磨く領域	情報社会の倫理
	法の理解と遵守
	公共的ネットワーク社会の構築 （二つの領域を土台にしてそれらを総合する発展的な領域）
知恵を磨く領域	安全への知恵
	情報セキュリティ

２　『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』を関連させる視点

「ここからはじめる情報モラル指導者研修ハンドブック」（平成22年，以下「ハンドブック」とする。）では，情報モラル教育の目標として，『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』の二つを相互に関連させながら，情報社会を生きる上での正しい判断力を身に付け，よりよい情報社会の創出を目指す実践的な力（情報モラルの実践力）を育てることが示されている。

また，山梨県総合教育センター（平成22年）は，『心を磨く領域』の体系的な指導は，各教科及び特別活動と密接な関連を保つ道徳の時間を核とすることで効果が上がるとしている。つまり，道徳の時間と教科等の関連を生かすとは，『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』の関連を生かすことであるととらえた。

これらのことから，道徳の時間を要としながら，二つの領域を，情報社会を生きる上での正しい判断力を身に付けさせる視点と，情報モラルの実践力を育てる視点で，関連させていくことで，情報モラルをより効果的に身に付け，高めることができると考えた。

３『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』の関連のさせ方

「ハンドブック」では，情報モラルについて正確に考え，判断するためには，「見えない人や社会とのつながりや接点が生じる」「一度書き込んだ情報は取り返せない」というような，その前提となる情報やメディアの特性についての知識が必要であり，『知恵を磨く領域』はもちろん，『心を磨く領域』においても考える基盤としての知識は必要であると述べられている。

また，情報モラルの学習の最後には，「自分はこれからこうしたい」と，行動につなげていけるように，考え方をまとめ，態度として表すことが大切であると述べられている。

これらのことから，情報社会を生きる上での正しい判断力を身に付けさせるためには，『知恵を磨く領域』において，情報やメディアの特性についての知識を得た上で，『心を磨く領域』において，道徳的判断力を育てる道徳の時間を行うことが有効であると考えた。また，情報モラルの実践力を育てるためには，『心を磨く領域』において，道徳的実践意欲や態度を育てる道徳の時間を行った上で，『知恵を磨く領域』において，実際に自分がこれからどうするのかを表現させ，実践へつないでいくことが有効であると考えた。

そこで，二つの領域の関連のさせ方を「情報社会を生きる上での正しい判断力を高めるための関連」（以下「判断力を高めるための関連」とする。）と，「情報モラルの実践力を高めるための関連」（以下「実践力を高めるための関連」とする。）と整理した。

４　より関連を深めるために

『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』の関連をより深めるために，次の二つのことを留意点として「プログラム」を構想した。

一つ目は，各教科等の授業や朝の会，帰りの会，また，掲示物等を活用して随時行う日常的な指導を充実させることである。「キックオフガイド」には，学校生活の中には，情報モラル指導のきっかけがいくつもあり，折にふれての指導の積み重ねが有効であると述べられている。

二つ目は，家庭との連携をとることである。「ハンドブック」では，情報モラルの授業により育てられた考え方や態度は，生徒が携帯電話やインターネット等の情報機器に接する時間から考えると，学校生活よりも家庭生活でより役立つと述べられており，通信や懇談会等で，学校での情報モラルの学習内容を家庭に伝え，家庭でも情報モラルの授業で学んだことについて，考えたり話したりすることで，生徒の意識も保護者の意識も，より高まり，大きな効果が期待できる。

さらに，「プログラム」を計画的に繰り返し実践していくことによって，より情報モラルが身に付いていくと考える。

これまで述べてきた二つの領域の関連のさせ方や留意点を，次頁の図１に「情報モラル学習プログラム構想図」としてまとめた。

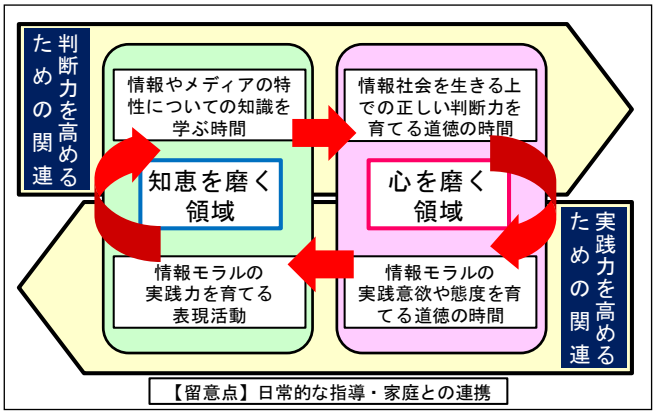

図１　情報モラル学習プログラム構想図

５『心を磨く領域』と『知恵を磨く領域』を関連させるための学習活動

(1) 情報やメディアの特性についての知識を学ぶ疑似体験等

「プログラム」の初めに，情報やメディアの特性についての知識を，疑似体験等を通して身に付けさせる。

「ハンドブック」によると，コンピュータを利用した疑似体験コンテンツを利用すると，情報モラル事例の場の共有を図ることができるとともに，情報やメディアの特性を合わせて理解させることができると述べられている。また，鹿児島県総合教育センター（平成24年）は，インターネットに関するトラブルについては，実際に児童生徒に体験させることができないため，疑似体験等ができる教材を有効に活用して，情報社会における体験活動として疑似的に体験させていくことが重要であると述べている。

(2) 情報社会を生きる上での正しい判断力を育てる道徳の時間と，情報モラルの実践意欲や態度を育てる道徳の時間

疑似体験等で学んだ，情報やメディアの特性についての知識は，情報社会特有の被害やトラブルにつながる「影の部分」と，便利さや快適さなどの「光の部分」を併せもっている。原克彦（平成20年）は，子どもを取り巻く情報社会には，多くの問題があるが，活用することで得る利点の方がはるかに大きいことも確かであるので，正しい使い方や安全な使い方などを理解し，それらを守る態度を身に付け，積極的に情報社会に参加するという姿勢が必要になってきていると述べている。つまり，道徳の時間においては，「影の部分」と「光の部分」の両方の視点から授業を組み立てるとともに，ねらいとする道徳的価値の自覚を深めていくことが大切である。

情報社会を生きる上での正しい判断力は，「影の部分」が影響したできごとに直面したときに，必要となる。そこで，道徳的判断力を育てる道徳の時間では，「影の部分」を切り口にした葛藤場面を設定し，その行為のもたらす結果や影響について考えさせる中で，より判断力を高めることができると考えた。その際に，疑似体験を通して得た知識が有効的に働くようにしていく。

また，「光の部分」を意識させたときに，ネットワーク社会を守り，発展させていきたいという意欲，つまり，情報モラルの実践意欲が高まると考えた。そこで，道徳的実践意欲や態度を高める道徳の時間では，「光の部分」を切り口にして授業を組み立てる。授業においては，「光の部分」のすばらしさを改めて認識させたり，「光の部分」がなくなったとしたらとゆさぶったりする中で，実践意欲をより高めることができると考えた。

(3) 情報モラルの実践力を育てる表現活動

辻井重男（2013）は，情報モラルや倫理の向上には，実践を通じて自ら考えることが重要であると述べている。また，実践の具体的な取組としての標語作りについて，前川和弘（2010）は，学んだことを整理し，情報モラルへの意識を継続させ，さらに他学級や他学年への意識啓発にもつながるツールであると述べている。

そこで，「プログラム」の終わりに，情報モラルについて学習してきたことを実践する場として，表現活動を組み込んだ。情報モラルについて，学んだり考えたりしてきたことを振り返りながら，標語やポスター，４コマ漫画，作文等で表現することで再認識し，情報モラルの実践力を高めていく。「キックオフガイド」で紹介されている川柳づくりの実践では，他の人に正しい行いをするよう呼びかけることで，よりよい社会を作り上げることに貢献しようとする態度を養うことができると述べられており，表現活動は，「公共的なネットワーク社会の構築」へ積極的に参画する態度を育成することにもつながると考える。

本研究で開発した「プログラム」を，次頁の図２に示す。

Ⅲ　研究の仮説及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

生徒の実態を考慮しながら，『心を磨く領域』である道徳の時間と『知恵を磨く領域』である教科等

を，「判断力を高める」視点と「実践力を高める」視点で関連させた情報モラル学習プログラムを開発し，実践していけば，情報モラルを身に付けさせることができるであろう。

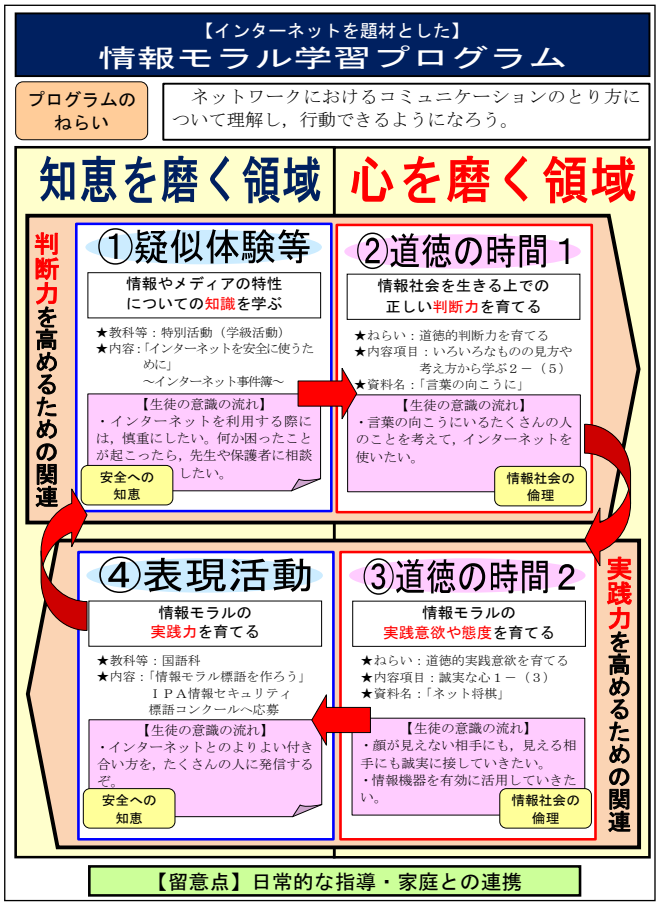

図２　情報モラル学習プログラム

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法について，表２に示す。

表２　検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
・「情報モラル学習プログラム」を通して，情報モラルが身に付いたか。	・事前，事後アンケート ・道徳の時間のワークシートへの記述 ・道徳の時間のアンケート ・表現活動での作品や，その説明文
・「判断力を高めるための関連」によって，道徳的価値の自覚を深めながら，情報社会を生きる上での正しい判断力が高まったか。	
・「実践力を高めるための関連」によって，道徳的価値の自覚を深めながら，情報モラルの実践力が高まったか。	

３　検証のためのアンケートの内容

情報モラルが身に付いたかどうかを検証するために，「プログラム」の事前と事後に，表３に示した内容でアンケート調査を行った。４段階評定尺度法で実施し，それぞれの質問内容について事前と事後を比較した。また，一つの質問内容に対し４点満点で集計したものを，『知恵を磨く領域』『心を磨く領域』「公共的ネットワーク社会の構築」の三つの領域，「判断力についての質問」と「実践力についての質問」で合計し，事前と事後を比較した。

表３　事前・事後アンケートの内容[1]

	領域	質問内容
判断力についての質問	知恵	①ネット上で情報を得るときには，慎重にするようにしている。
		②携帯電話やインターネットで困ったことがあれば，先生や家の人に相談したいと思う。
	心	③ネット上で書き込みをするときには，自分の知らない人たちも読むことを意識している。
		④友達のことで腹が立ったことを，ネット上に書き込むことはよくないと思う。
		⑤匿名であっても，ネット上で書き込みをする時は気をつけたい。
実践力についての質問	知恵	⑥使う時間を家の人と決めて，コンピュータや携帯電話を使っている。
		⑦情報機器を学習や生活で，有効に活用している。
	心	⑧友達がもし，情報機器を使ってよくないことをしていたら，声をかけることができる。
	公共	⑨情報社会の一員として，私たち一人一人の行動が社会全体に影響を及ぼす可能性があることを意識している。
		⑩情報機器との付き合い方について学ぶことは意味があると思う。

※　表の「知恵」は『知恵を磨く領域』，「心」は『心を磨く領域』，「公共」は「公共的ネットワーク社会の構築」のことを指している。

Ⅳ　研究授業について

１　研究授業の内容

○　期間　平成25年７月８日～平成25年７月12日
○　対象　所属校第２学年（２学級77人）
　　所属校第３学年（２学級63人）
　　※ただし，第３学年においては，道徳の時間のみ実施する。

２　研究授業の概要

研究授業として行った二つの道徳の時間の概要を，次頁の表４に示す。

Ⅴ　研究授業の分析と考察

１　「情報モラル学習プログラム」を通して，

情報モラルが身に付いたか

情報モラルが身に付いたかどうかを検証するために，２年生においては，「プログラム」のすべて，３年生においては，道徳の時間のみ実施して，事前・事後のアンケート結果を比較した。

図３は，表３の事前・事後アンケート（10項目）の結果を合計した数値の平均値を，２年生と３年生で比較したグラフである。３年生が0.90ポイント増加しているのに対し，２年生は2.16ポイントと大きく増加していることが分かる。

図４は，事前と事後の差の内訳を領域別にまとめたものである。３年生は，『心を磨く領域』のポイントがほとんど増加していなかった。２年生においては，『知恵を磨く領域』と『心を磨く領域』を関連させた「プログラム」を実施したが，３年生においては，道徳の時間のみの実施で，『知恵を磨く領域』と関連をさせなかったことから考えると，情報モラルを身に付けさせる上で，二つの領域を関連させることは，より効果的であったことが分かった。

また，事後アンケートにおいて，情報モラルについて学習してきたことを振り返って感じたことや考えたことをまとめさせたところ，次頁の生徒Ａのように，「プログラム」の前後での自分を比べながら，

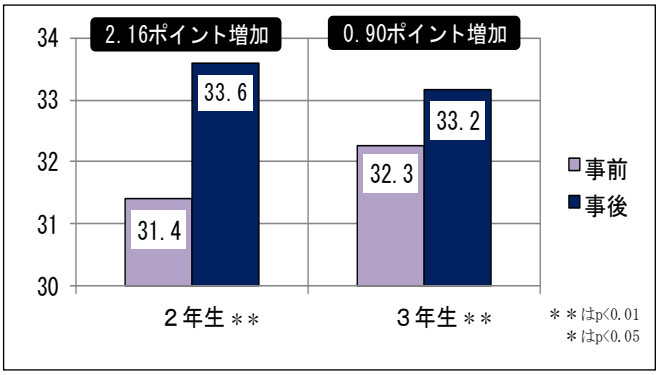

図３　情報モラルポイントの変化（満点：40ポイント）

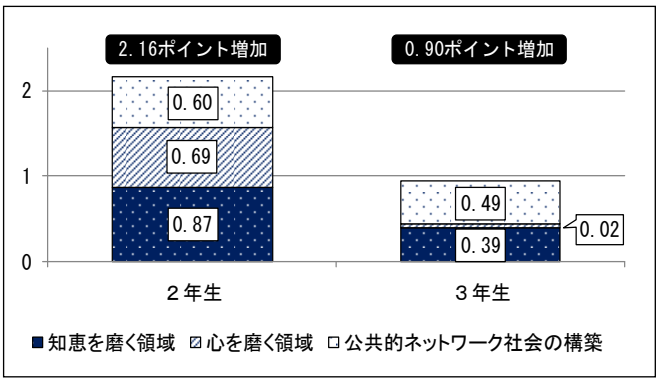

図４　領域別のポイントの伸び

※　２年生と３年生のポイント差について，ｔ検定を行ったところ，有意な差（$p<0.05$）が見られた。

表４　道徳の時間の概要

	道徳の時間１（７月８日）	道徳の時間２（７月12日）
主題名 内容項目	いろいろなものの見方や考え方から学ぶ ２－（５）謙虚に他に学ぶ	誠実な心 １－（３）自主・自律
ねらい	加奈子の書き込みの内容や，忠告を受けた加奈子の気持ちを考えることを通して，それぞれの立場を尊重し，いろいろなものの見方や考え方から学ぶことの大切さを理解して，ネットワーク社会においてよりよい情報発信をする上での道徳的判断力を育てる。	一方的にネットでの将棋の試合を中断させてしまう僕の不誠実さや，見えない相手とどう向き合うかで自分が試される気がするという敏和の誠実さについて考えることを通して，誠実に実行し，その結果に責任をもとうとする道徳的実践意欲を育てる。
資料名	「言葉の向こうに」 （出典：文部科学省「中学校道徳読み物資料集」）	「ネット将棋」 （出典：文部科学省「中学校道徳読み物資料集」）
主な学習の流れ ○基本発問 ◎中心発問 ●情報モラルに関わる発問	１　掲示板クイズにチャレンジする。 ○　この掲示板の書き込みは，どこのファンサイトのものでしょうか。 ２　資料「言葉の向こうに」を読んで，話し合う。 ●　あなたも掲示板を見ている一人として，書き込みをしてみましょう。 ●　加奈子の書き込みについてどう思いますか。 ○　「中傷する人たちと同じレベルで争わないで。」という書き込みを見て，私はどんなことを思っているのでしょう。 ◎　忠告の書き込みによって，気付いた「すごいこと」とは，どんなことでしょう。 ３　教師の説話を聞く。 ○　日清食品お客様センターでの仕事について考えてみましょう。	１　情報機器の便利な機能を知る。 ○　どこのサイトでしょう。何のサイトでしょう。 ２　資料「ネット将棋」を読んで，話し合う。 ●　黙ってコンピュータ画面を閉じたり，いきなりログアウトする「僕」はどんなことを思っているのでしょうか。また，ログアウトされた「相手の人」はどんな気持ちでしょうか。 ◎●　敏和のツッコミに笑えなかった僕は，どんなことを考えているのでしょう。 ３　教師の説話を聞く。 ○　春名風花さんのツイッターの［　　］にあてはまる言葉を考えてみよう。 「インターネットはひとりひとりが小さな［情報］［局］。自分のブースから，全世界に見られる番組を発信しているという自覚を持ってください。」

情報モラルが高まったことを実感したり，生徒Ｂのように，情報機器の「光の部分」にも注目し，情報モラルの大切さについて考えを深めた記述が見られた。(以下の【生徒Ａ～Ｋ】は２年生の生徒である。)

【生徒Ａ】授業を受ける前は，ネットでの書き込みについて軽く考えていたのですが，二つの道徳の時間を通して，クリック一つで自分の一生に関わるほど大変なことが起こってしまうかもと感じました。一つ一つの行動が相手をどういう気持ちにさせるのかよく考えて行動しようと思いました。
【生徒Ｂ】便利に使える情報や機器だからこそ，たくさんの危険がひそんでいるんだと思う。ネットは，思いやり・誠意・見極め・責任などをもって利用することで，世界中の人が気持ちよく情報機器を利用することができ，明るい未来へと進んでいくんだと思う。

事後アンケートの記述

これらのことから，『心を磨く領域』である道徳の時間と『知恵を磨く領域』である教科等を関連させた「プログラム」を実践していくことは，情報モラルを身に付けさせる上で有効であったことが分かった。

２　「判断力を高めるための関連」によって，道徳的価値の自覚を深めながら，情報社会を生きる上での正しい判断力が高まったか

道徳の時間１の事前の活動として，特別活動において，「インターネット事件簿」と題し，携帯電話ゲームサイトを全員で疑似体験させた。図５はその時の授業の様子である。疑似体験を通して，問題のある行動５点についてグループ協議した上で，インターネットを利用する時は慎重にすること，困ったことがあったら相談をすることの大切さについて指導した。

図５　疑似体験の様子

道徳の時間１では，「言葉の向こうに」という資料を使って授業をした。ネット上の掲示板で，ある選手への心ない書き込みに腹を立てた主人公に注目させ，「自分ならどうするか」を考えさせた。図６は，その判断をワークシートから四つに分類したグラフである。「書き込みをしない」または，「忠告的な書き込み」をした生徒が，３年生においては約20%であったが，２年生においては約半数を占めた。書き込みをしない理由として，「書き込んだら，エスカレートしそうだから」「反論すればするほど傷つくコメントが返ってきそうだから」という記述が見られた。これは，事前に疑似体験を通して，インターネットを利用するときには慎重にしないと，さまざまな影響が出てくることについて学習したことが要因であると考えられる。

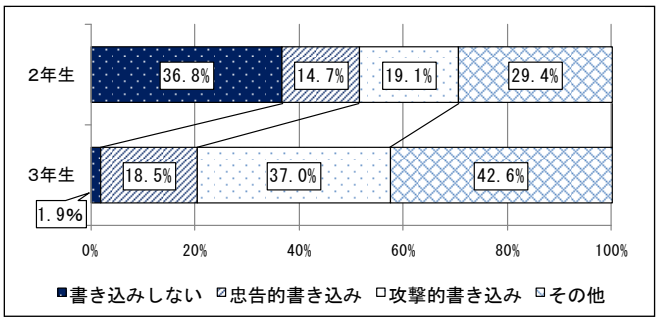

図６　２年生と３年生における判断内容の比較

道徳の時間１の授業を終えてのアンケートでは，「疑似体験をしたので道徳の時間に考えやすかった」と肯定的に回答した生徒が96%いた。また，事後アンケートにおいて，生徒Ｃのように，疑似体験を現実に起こり得るものとしてとらえた記述や，生徒Ｄのように，先のことをしっかり見通した上での判断の大切さについて気付いた記述が見られた。

【生徒Ｃ】携帯ゲームのシミュレーションは，悪いことばかりで，ちょっと極端な気がしたけど，実際はあれぐらいか，あれ以上なんじゃないかなと思いました。
【生徒Ｄ】情報モラルについて学んだことは，慎重に行動しないといけないことです。何も考えずに写真を載せたり，会員登録をしたら，かえって危険な目にあうことが分かりました。その行動があとにどうなるかを考えて行動していきたいです。

事後アンケートの記述

次頁の図７は，事前・事後アンケートの結果を「判断力についての質問」（５項目）で合計した数値の平均値を比較したものである。２年生の判断力が３年生に比べて大きく増加していることが分かる。

また，道徳の時間１で，ねらいとする道徳的価値について，「いろいろな見方や考え方を受け入れ，学びながら，成長していくことの大切さが分かったか。」という質問をしたところ，約96%の生徒が肯定的な回答をした。生徒の記述には，次頁の生徒Ｅのように，サイトへの書き込みについて慎重にしていきたいという思いを高めたものや，次頁の生徒Ｆのように，ネット上での「相手」として，自分の知っ

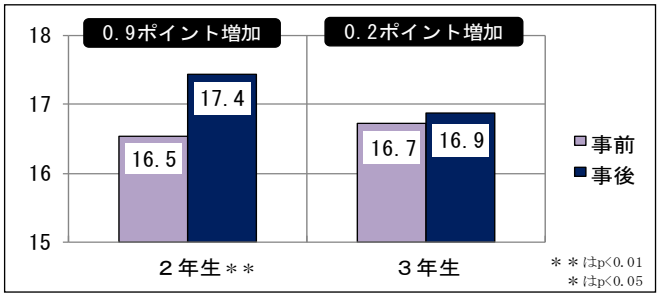

図７　判断力ポイントの変化（満点：20ポイント）

※　２年生と３年生のポイント差について，ｔ検定を行ったところ，有意な差（p<0.05）が見られた。

ている相手だけでなく，自分の知らない人や自分とは立場が違う人がたくさんいることを意識した記述が見られた。

【生徒Ｅ】つぶやいたり載せたりする前に，本当にこの文を載せても大丈夫か考えたり，正しく判断することが大切だと感じました。
【生徒Ｆ】一文字一文字，考えて打たないと，「ファンの中でもひどい言葉を使うやついるじゃん」みたいな感じになり，ネットだから，その中傷をひどい言葉で返す人以外にも影響があると思いました。だから，むやみに言い争ってはいけないと思います。

道徳の時間１　アンケートの記述

これらのことから，「判断力を高めるための関連」は，道徳的価値の自覚を深めながら，情報社会を生きる上での正しい判断力を高める上で有効であることが分かった。

３　「実践力を高めるための関連」によって，道徳的価値の自覚を深めながら，情報モラルの実践力が高まったか

道徳の時間２で，ねらいとする道徳的価値について，「顔が見えない相手にも，顔が見える相手にも誠実に接することの大切さが分かったか。」という質問をしたところ，約97%の生徒が肯定的な回答をした。道徳の時間２を終えてのアンケートの記述からも，生徒Ｇのように，道徳的価値を深めながら，情報モラルの実践意欲を高めた姿を見取ることができた。また，生徒Ｈのように，目の前にいる相手と接する時よりも，より配慮がいることを実感している姿を見取ることができた。

【生徒Ｇ】自分もオンラインゲームで，急に自分のパソコンの接続が切れたことがあり，謝ることもできず，とても申し訳ない気持ちになったことがある。目で見える相手でも，見えない相手でも，誠実に接することが大切だと思った。

【生徒Ｈ】インターネットは自分だけでなく，いろいろな人が画面の向こう側にいるので，その人たちのことを考えて利用しないといけないと思いました。みんなが気を使わないと，悪い方向へ行ってしまうと思います。

道徳の時間２　アンケートの記述

表現活動においては，国語科で情報モラル標語作りに取り組ませた。情報モラルについて学んできたことを標語で表現し，相互評価させ，ランキングを出した。優秀作品については，図８のように，学年通信にも掲載し家庭にも情報提供することができた。以下の標語作品とその説明，標語作りを終えての記述からも，生徒Ｋのように，「影の部分」とともに「光の部分」にも意識を向けながら，情報モラルについて学んだことを多くの人に呼びかけることで，情報モラルの実践力を高めた姿を見取ることができた。

図８　学年通信

「クリックで　便利な機器に　迫る危機」【生徒Ｉ】
　クリックすることでウイルスやお金の請求など，自分へ危機が迫ってくることがあるので，一つ一つの操作を慎重に行ってほしいという願いを込めて作りました。

「いまやめる」「あれから何分やってます？」【生徒Ｊ】
　道徳の資料を読んで，自分はいつも時間を決めてやっていないことについて振り返りました。自分はもちろん，他の人にも時間を意識してもらいたいと思って作りました。

【生徒Ｋ】標語を作ったことで，自分自身も改めてインターネットを利用するときは気をつけようと思いました。インターネットは良い部分も悪い部分もあるけど，上手に利用していけたらいいなと思いました。

標語作品とその説明，標語作りに関する記述

次頁の図９は，事前・事後アンケートの結果を「実践力についての質問」（５項目）で合計した数値の平均値を比較したものである。実践力のポイントは，判断力のポイントと比べて低く，２年生の1.2ポイントの増加と，３年生の0.8ポイントの増加との間に有意な差は見られなかった。そこで，携帯電話の利用

者（自分の携帯電話または，スマートフォンを所有している生徒，家族の携帯電話を利用している生徒のこと。）で実践力を比較してみると，３年生は変化がなかったが，２年生の伸びは1.5ポイントで，さらに増加していた。

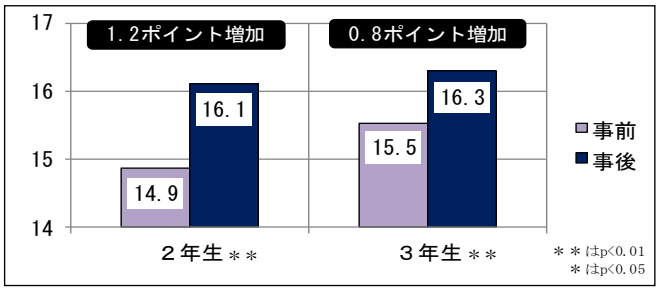

図９　実践力ポイントの変化（満点：20ポイント）

また，図10は，アンケート⑨「情報社会の一員として，私たち一人ひとりの行動が社会全体に影響を及ぼす可能性があることを意識している。」の結果を，事前と事後で比較したものである。この項目は，２年生の中で，肯定的回答の割合が，事前で一番低く，事後に最も増加した項目である。「実践力を高めるための関連」を通して，自分たちの行動が社会に影響を及ぼしていることに気付き，ネットワーク社会をよりよいものにしていこうとする思いが，18.6ポイントという肯定的回答の増加につながったと考える。しかし，依然として否定的回答をしている10.8%の生徒のためにも，本プログラムをベースにして，題材を変えながら，計画的に繰り返し実践していくことが必要であると考えた。

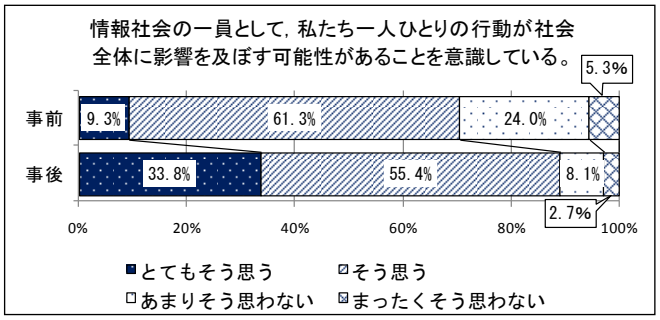

図10　事前と事後におけるアンケート⑨の比較

これらのことから，「実践力を高めるための関連」は，道徳的価値の自覚を深めながら，情報モラルの実践力を高める上で，有効であることが分かった。さらに，情報機器をよく利用している生徒にとっては，関連させることがより有効であることが分かったので，図１で示したような「日常的な指導」や「家庭との連携」を通して，実践の機会を充実させていくことがより重要になると考えた。

Ⅵ　研究のまとめ

１　研究の成果

情報モラルを身に付けさせるために，生徒の実態を考慮しながら，『心を磨く領域』である道徳の時間と『知恵を磨く領域』である教科等を，「判断力を高める」視点と「実践力を高める」視点で関連させた情報モラル学習プログラムを実践していくことが有効であることが分かった。

２　今後の課題

○　情報モラルは，「プログラム」の一度の実践によって，身に付くものではない。さまざまな題材や角度から，計画的に繰り返し実践していくことが大切である。そのために，今回は「インターネット」を題材とした「プログラム」を作成したが，「メール」や「著作権」など，他の題材でも「プログラム」を開発することで実践例を増やし，３年間または９年間を見通した指導計画を作成していく必要がある。

○　道徳の時間１を終えて，「大切なことが何か分かったか」というアンケートを取ったところ，91.7%の生徒が肯定的な回答をしたが，「何が大切なことだと思ったか」に対する記述を見ると，ほとんどの生徒が，情報モラルに関わる記述をしていた。情報モラルを身に付けさせるための道徳の時間においては，授業後の印象が情報モラルの視点に偏ってしまう傾向にあるので，道徳的価値の自覚を深めつつ，情報モラルも身に付くようなねらいや発問をどのように設定していけばよいのか，追究していく必要がある。

【注】

(1) 社団法人日本教育工学振興会(平成19年)：『すべての先生のための「情報モラル」指導実践キックオフガイド』p. 39に掲載されている「情報モラルチェックシート」（児童生徒用）を参考にして，稿者が作成した。

【引用文献】

1)　文部省(平成12年)：『高等学校学習指導要領情報編』開隆堂出版 p. 82

【参考文献】

広島県立教育センター(平成24年)：「道徳の時間における情報モラルを身に付けさせる教材開発」『研究紀要第39号』